

長崎学と越中先生

富久 幸芳

一般に「長崎学」と言われますが、私には他の地域と異なる幅広さと深みを持つと思っています。

例えば、長崎の宗教史はそのまま日本のキリスト教史になりますし、カクレキリシタン史を見れば、外来宗教と土着文化との融合史という側面も見えます。経済史という意味で見れば、長崎の商業史はそのまま日本とヨーロッパとの貿易史でもあり、海外文化交流史でもあります。また、貿易の利益を背景とした社会貿易史を見ると、幕藩体制下における共和制社会史の様相も見えます。また、蘭学の系譜を見ると、日本の科学史や医学史となり、長崎に全国から優秀な若者が遊学に来たことを考えると、その一つ一つが研究分野として成立するような重みがあり、多面性があります。



東古川町小屋入り（北川のみ子撮影）

「長崎学」を開いたのは古賀十二郎先生です。

古賀先生は、明治十二年（一八七九年）に長崎市五島町に生まれ、東京外国語学校を卒業、広島で三年間英語教師をし、その後長崎に戻り、歴史家として長崎学の基礎を築いた人です。長崎の地方史研究家の系譜をたどると必ず古賀先生に行き着くのです。

この古賀先生の孫弟子に当たる方が越中哲也先生です。越中先生は現在「長崎歴史文化協会」の理事長をされています。長崎歴史文化協会は十八銀行グループの長崎経済研究所に事務局があるそうです。

は九州のシュガーロードでした。長崎に伝来したカステラは全国に広がったそうですが、それは長崎に医学を学びに来た医者や、カステラは卵や砂糖を豊富に使うので滋養に良いということで、その製法を学び、より一層全国に広がったということでした。

しかし、番組の中で「何故、全国にカステラは広がったのですか」という質問に、越中先生の答えは一言、「それは簡単なことで、カステラはおいしかったからです。」これには、思わず噴き出しました。

江戸時代、出島のオランダ商館員は主食としてパンを必要としますが、キリシタンに関係のあるパンを焼く場所の許可は奉行所から長崎町内の一カ所が指定されており、そこから出島に運ばれたそうです。パンを自由に焼いたり、庶民が食することは禁じられていたそうです。

「長崎学」を堅い学問にして難しい解説をするのも良いと思いますが、越中先生のように誰にでもわかるように平易に話をされ、ユーモアや、何とも言えない面白みを持ち、素人にも興味をかき立たせることも重要なことだと思います。

長崎の歴史と文化は、長崎の財産だと思います。それを基礎にして、古賀十二郎先生を祖とする長崎学の系譜があり、越中哲也先生につながります。こうした系譜を大切に継続していくことが必要だと思います。

そして、こうした長崎学の活動を基礎に「長崎さるく」のような観光振興につながるべく、学問のみならず、経済振興にもつながって欲しいと思います。いずれにしても、長崎という土地の持つ面白さを大切にしていきたいと思っています。

（追記）

・ 全くの私事ですが、長崎歴史文化協会が「ながさきの空」という冊子を発行されており、その内容は十八銀行のHPでも公開され、私も時々覗いています。ある時、HPを見てみると、そこに私の妻の母方の祖父の名前を見つけました。その祖父というのは、戦前、旧制長崎中学の国語教師をしていました。越中先生はその教え子だそうです。それを見つけて連絡をしたのが先生と知り合うきっかけでした。「あららー」と言っていて、快く会ってくださいました。

・ 新中川電停の近くに鳴滝高校がありますが、そこが旧制長中の校舎だったそうです。その裏門の前の石段を登ったところに、妻の祖父の旧宅があったそうです。越中先生も中学二〜三年生の頃、「先生の家にお邪魔して勉強を教えてくださいました。」と話をされていました。「ロング先生は厳しかったもんねー」と越中先生が言っておられ、こちらが恐縮しました。

私は、ひよんなことから越中先生と知り合うことができ、何回かお話しする機会がありました。

越中先生は「精霊流し」や「くんち」のテレビ解説もされておられ、もう九十歳になられるそうです。先生は、NBCテレビが毎年盆の八月十五日の深夜に放送する「精霊流し」の解説をされておられるそうで、先生が「来年は、私も船に乗るとですたい。」のセリフで終わられるそうです。

先生に言わせると、「くんち」の解説は下調べができるので、何とかなるそうですが、「精霊流し」は、どこの船が次に来るのかわからないので、解説が難しいそうです。

昨年（平成二十二年）の精霊流しの番組を見ていたら、「この船は〇〇町の船で、船先がピシャーとしてよかですね。こちらの船はスーとしたところが伝統を良く表しています。」といった解説をされておられました。

また、亀山社中を世の中に紹介されたのも越中先生だそうで、確か昭和二十九年に、毎日新聞のコラムに「亀山の白袴」という表題で書かれたのが最初だそうです。

長崎の古老の話によると、「亀山のやつは悪かつたもんねー」というのが、当時の長崎の人たちの感覚だったようで、「確かに、浪人集団が墓の上の一軒屋にたむろしていたら、周囲からは物騒に思えたのかも知れません。」と越中先生も言われていました。

ちなみに、「長崎に「亀山」という地名はなく、亀山社中のあった所は「伊良林次石」という処だったそうです。ところで何故、「亀山」の名が付いたかというところ、社中の置かれた屋敷が、一八〇〇年初頭から五十年程度焼かれた「亀山焼」の細工場の跡であったからだそうです。亀山焼の窯が閉じられた一年後に、坂本龍馬たちが長崎に来て、この屋敷を根城にして社中を作り、「亀山社中」の名が付いたのだらうということです。日曜、昼のテレビを見ていたら、越中先生が出られていました。内容

六月一日はくんちの小屋入りです。今年（平成二十三年）は本社長崎支店のある出島町が踊町になります。今年も越中先生がくんちの解説をされるのでしょうか。楽しみです。（NTT西日本長崎支店 営業部長）

風信

○明治時代以降、長崎では六月一日を「小屋入り」と言い、長崎くんち踊町の人々は早朝よりシャギリの音に合わせて目をさまし、一同まず諏訪神社に夏衣の紋付袴にて参拝、午後は袴をぬぎ夏もの唐人パッチをはき、紋付の裾をからげ、くんちの時間にお世話になる年番町や商工会の事務所にシャギリと共に挨拶に回る。長崎の人達は「このシャギリの音を聞くと、何故かわくわくします」と言われる。

○さて、今年の「梅雨入り」は六月十一日と暦に記してありましたが、六月五日「ツユ入りした」と気象台より発表。今年も例年になく早いツユ入りでした。

○五月二十七日と言えば私は東郷元帥が対馬の沖でバルチック艦隊に勝利された日であった事を思いだし、「旗艦の帆柱 信号あがる み空は晴れど風たちて…」と呟いた。

○二六〇三年長崎イエズス会(Collegio《学校》で出版されたVocabulario《日ポ辞書》には「Tuyu《ツユ》を地方ではNagaxi《ナガシ》と言いつと記してあった。

○七月の行事は七月七日の七夕の行事に始まる。「長崎歳時記」には次のように記してある。

七月六日 家々色紙をもつて短冊を造り詩歌を書き、女子は更に色紙にて衣服をつくり共に竹に結び立て、その夜は座敷の縁側に台を置き鏡餅・ソーメン・西瓜等をお供え 燈をともし乞巧奠を願う。

○乞巧奠とは中国古来の祭礼で（旧）七月七日農耕を司る索牛星と織物を司る織女星が天の川に鵲の鳥が作る橋を渡って、一年に一度お逢いになるのである。其の時に二星にお願いすると願い事を適えて下さると言う。

○唐の白楽天の叙事詩「長恨歌」にも其の事が次のように記してある。「七月七日長生殿 夜半無人私語時 在天願作比翼鳥 在地願為連理枝……」

○今月は次の書籍を御寄贈いただいた。

長崎文献社より『長崎学への道案内』（二、〇〇〇円）『長崎游学・軍艦島は生きている』（八〇〇円）『岩崎弥太郎の長崎日記・赤瀬浩著』（八〇〇円） 軍艦島の資料は新名勝の案内であり、長崎日記は良く資料が整理しており、両書とも大いに参考になった。

○諫早史談会より「諫早史誌43号」前号に引き続き「三條公記」「島原大変記」等の御力作。有難うございました。

長崎歴史文化協会 研究室

TEL 八二二一 一五四〇
十八銀行公会堂前出張所 2F

